

パーリ仏教における喜

柏 原 信 行

喜を表すパーリ語には、受 (vedanā 感覚) の喜 (somanassa) の他に、四禪支・五禪支の喜 (pīti) や四梵住・四無量の喜 (muditā) があり、また、pāmojja/pāmujja, nandi, rati や隨喜 (anumodanā) がある。肉体的な快感を示す樂受 (sukha-vedanā) に対する精神的なよろこびとしての喜受 (somanassa-vedanā) 以外の「よろこび」を表す様々な語は、パーリ仏教ではどのように解釈されているのか。本稿では、これらの語の用例を検討し、その語義を解明することによって、ニカーヤにおける喜の解釈を探り、心理分析を中心とするパーリ・アビダンマにおける喜の解釈を検討し、更には現代のテーラ・ヴァーダ仏教における喜の解釈を明らかにする。

1. Visuddhimaggaにおける定義

喜を表す諸語のうち、pīti と muditā は心所法 (cetasika-dhamma) として、Visuddhimaggaにおいて定義づけがなされているので、これを見てみよう。

〔a. pīti〕 先ず尋・伺・喜・樂・一境性という禪支の pīti については、「喜ばせる (piṇāyati) のが喜 (pīti) である。大喜びさせる (sampiyāyana) のを相とする。身心の喜 (kāya-cittapīṇana) を味とし、或いは満悅 (pharaṇa) を味とする。躍り上がる (odagya) のを起とする。」と定義されている。pīti には、小喜 (khuddikā-pīti)・利那喜 (khanikā-pīti)・繼續喜 (okkantikā-pīti)・躍喜 (ubbegā-pīti)・遍満喜 (pharaṇā-pīti) の5種がある。小喜は身の毛がよだつような喜び、利那喜は瞬間毎に光る稻妻のような喜び、繼續喜は海岸に寄せる波のような喜び、躍喜は身体が浮いて躍り上がるような喜び、遍満喜は膨らませた膀胱やあるいは洞穴に水が流れるような喜びであるとされている。この内の躍喜については次のような二つの例が挙げられている。先ず一つは、Punnavallika に住んでいた Mahātissa 長老が、満月の晩に「このような晩には四衆が大塔を礼拝するのだ」と考えて、仏を所縁としてこの躍喜を起こして、ボールのように弾んで Anurādapura の大塔まで跳んで行ったというものである。もう一つの例は、Girikanḍaka 精舎の近くの Vattakālaka 村のある良家に娘がいた。両親は精舎へ聞法に出かけた

が、娘は妊娠中で外出困難であった。娘は家の庭から精舎の方を臨んで塔の灯明や四衆が花や香を供えるさまや右繞したりするのを眺め、彼らが読経する声を聞いた。そして「精舎で塔の庭を歩き聞法できる人々は幸福だ」と思い、仏を所縁として強い喜である躍喜が生じ、気づかぬうちに空中を跳んで両親より先に精舎に着いてしまったというものである。5種の喜 (pīti) が生じれば、身心の軽安が生じる。軽安が生じると身心の樂が生じる。樂が生じると刹那・近行・安止の三種の定が完成するとされる。(Vism 143f)

禪支の喜 (pīti) は、先に挙げられた5種の pīti のうちの最高のものである遍満喜であるとされる。

また、砂漠で疲労困憊した者が林や水を見たり、それらについて聞いたりした時が喜 (pīti) にたとえられ、実際に木陰に入ったり水を飲んだりする時が樂 (sukha) にたとえられて、欲する所縁を獲得した満足感 (iṭṭhārammaṇapaṭilābhatuṭṭhi) が喜 (pīti) であり、その所縁を獲得して味を享受すること (paṭiladdharasānubhava-na) が樂 (sukha) であるとされ、喜 (pīti) があれば必ず樂 (sukha) があるが、その逆は成立せず、樂があっても必ずしも喜があるのではないとされる。喜は行蘊であり、樂は受蘊であると解説されている。(Vism 145)

ここには、心の受蘊としての喜 (somanassa) と行蘊としての喜 (pīti) との区別については説かれていらないが、樂 (sukha) との関係から推測しうる。

Visuddhimagga におけるこれらの解説から、禪の支分としての pīti とされる「よろこび」は普通の喜びではなく、極度に大きな喜びが意味されていることが明らかである。

[b. **muditā**] 次に慈・悲・喜・捨の四無量(四梵住)の喜である muditā については、「これをそなえた者が喜ぶ (modanti) ことである。また、自ら喜ぶ (modati) ことである。また、喜ぶことそのもの (madanamatta) である。喜 (pamodana) を相 (lakkhaṇa 特色) とする。嫉妬のないこと (anissāyana) を味 (rasa 作用) とする。不樂の打破 (arati-vighāta) を起 (paccuppaṭṭhāna 微候) とする。有情の幸福を見ると (sattānam sampattidassana) を足処 (padatthāna 直接原因) とする。不樂がなくこなること (arati-vūpasama) が成功であり、笑いの発生 (pahāsa-sambhava) が失敗である。」(Vism 318) と解説されている。

ここに見られるように、muditā は、modanti, modati, modanamatta, pamodana といった、語根を mud (喜悦する) とする語によって解説されている。そして、不樂 (arati) や嫉妬 (issā) の逆であり、他者の幸福を喜ぶことを意味す

ることになる。

2. nikāya 中の用例

次に、喜びを表す諸語について nikāya 中の用例を見てみよう。

[a. pīti] 先ず、pīti については下記のような用例が見られる。「世尊に施食をしたガティカーラに半月、父母に七日間喜楽 (pīti-sukha) が去らなかった。」(M ii 52)

そのほか、以下の用例では、後述する pāmojja とともに pīti が挙げられている。「裁判の検問者の無悔恨は喜 (pāmojja) の為であり、(pāmojja) は喜 (pīti) の為であり、喜は軽安の為であり、軽安は楽の為であり、楽は心定の為である。」(V v 164), 「雜染の諸法を断じて清浄な法を増長し現法にて智慧の円満と広大を自ら実証して通達して住すれば、喜 (pāmojja) を得、喜 (pīti) を得、軽安となり、正念正智を得て安楽に住することができる。」(D i 196), 「信受により喜 (pāmojja) を得、喜 (pīti) を得、喜を得た者安になり、身軽安の者は楽を受し、心定を得る。」(M i 38), 「縁について、智・解は身軽脱・離貪・厭離・如実智見・定・楽・軽安・喜 (pīti)・悦 (pāmojja)・信・苦・生・有・取・愛・受・触・六処・名色・識・行・無明」(S ii 29f), 喜 (pāmojja)・喜 (pīti)・身軽安・楽 (sukha)・心定」(S v 156, S v 397f, A iii 21, A iii 285)

これら頻繁に見られる用例はいずれも定への過程の一段階を意味し、禅支としての喜を表しているといえよう。

[b. muditā] 次に muditā については、nikāya では四梵住 (四無量) の一つとして挙げられる以外にはあまり見られない。

「喜 (muditā) を修すれば、不楽 (arati) は滅す。」(M i 424), 「老死から解脱するための36の所縁について：喜想 (muditā-saññā)・一切世間不楽 (arati) 想・四梵住」(Mil 414), 「不楽 (arati)・害・非法行を断つ喜 (muditā)・無害・法行」(A iii 448)

以上の例の内容は、先述の Visuddhimagga での解説に等しいといえよう。

[c. pāmojja/pāmujja] 次に、muditā と同じ語根 mud を有する pāmojja/pāmujja としての喜の用例を見てみよう。

「喜 (pāmojja) がなければ、喜 (nandi)・軽安が無くなり、苦が生じる。」(Sii 78), 「法と善にともなう喜 (pāmujja) を心の資具とする。」(M ii 206), 「愛欲・不善法に近づかぬ者には愉快 (pamuda) から喜 (pāmojja) が生じるように楽 sukha が生じ樂以上の喜 (somanassa) が生じる。」(D ii 214)

この他 nikāya 中の pāmojja の用例については、先述のように pīti と共に挙げられている場合が頻繁にあった。それらによれば、pāmojja は pīti を得るための前段階と言えよう。

[d. nandī/abhinanda] nikāya 中の喜びを表す語のうちでは nandi や nandī,

abhinanda などのように *nand* を語根とする語も見られる。*nandī* 等については、「悪魔や天神は言う。『子を持つ者は子等によって喜び (nandati), 牛を持つ者は牛等によって喜ぶ。依 (upadhi) は人の喜である。依のない者は喜ばないからである』と。世尊は言う。『子がある者は子等によって愁い, 牛を持つ者も牛等によって愁う。依 (upadhi) は人の愁いである。依のない者は愁えないからである』と。」(Sn 6; S i 6, 107), 「諸法に対する欲・貪・喜 (nandi)・渴愛等を滅して解脱する。」(M iii 32, S iii 10), 「過去を追うとは過去にこのような色があったといって喜 (nandi) を起すことである。」(M iii 189), 「喜 *nandī* の集・滅に依って苦の集・滅がある。」(M iii 267), 「喜 (nandi) の生起により苦が生起する。」(S ii 60), 「六境に対する喜 (nandi) によって執着が起り, 繫縛される。」(S ii 36f), 「軽安に依って喜 *nandi* がなくなり, 苦が滅する。」(S ii 599), 「喜 (nandi) が滅すれば苦が滅する。」(S ii 60), 「諸法を歓喜 (abhinandati) する者は苦から解脱しない。」(S iii 31), 「六根六境を喜ぶこと (abhinanda) は苦を喜ぶのであり, 苦から解脱できない。」(S iv 13f), 「喜 (nandi) と不樂 (arati) は25種の心を弱くするもののふたつである。」(Mil 313)

これらの例から明らかなように, *nand* を語根とするこれらの語は, *pīti* や *muditā* のように修習されるべきものではなく, 逆に苦を生じさせるものとして対治されるべきものである。

[e. *nandi-rāga*] 喜 (nandi) はまた貪 (rāga) と結合して喜貪 (nandi-rāga) として用いられている。

「欲を離れ色の縛を超え喜貪 (nandi-rāga) の尽きた者は沈まない。」(S i 53), 「喜貪 (nandi-rāga) の滅により解脱がある。」(S ii 142), 「比丘は悪魔の喜貪 (nandi-rāga) の糸のついた利得と供養と名譽の鉛に刺されないようにせよ。」(S ii 227), 「無常觀によって喜貪 (nandi-rāga) が尽き解脱する。」(S iii 51, 54), 「欲愛, 有愛, 非有愛が喜貪 (nandi-rāga) を伴う。」(S iii 158) 「殺人者としての喜貪 (nandi-rāga)」(S iv 174), 「川に沈むことにたとえられる喜貪 (nandi-rāga)」(S iv 180), 「苦集聖諦は, 後有をもたらし喜貪 (nandi-rāga) を伴い隨所歓喜 (abhinandi) する渴愛である。すなわち欲愛・有愛・無有愛である。」(V i 10, S v 421, 425, 426)

nandi は苦をもたらすものであったが, 貪 (rāga) と共に用いられて更にその不善としての性格が強調されている。

[f. その他] 喜びを表すものとしては, 以上の *pīti*, *muditā*, *pāmojja*, *pāmujja*, *nandī*, *abhinanda*, *nandi-rāga* のほかに, 以下の例もある。

「愛より起り生じるのは喜 (ānanda-somanassa) ではなく, 愁悲苦憂惱である。」(M ii 106) によれば, *ānanda* は語根が *nand* であるが否定的なものではなく, 阿難

という弟子名にも用いられていることから不善の意味ではないと見られる。

次に、歓喜心(udaggacitta)も定型句として以下の例に見られる。「仏は施・戒・昇天を説き、聞法者に堪任心、柔軟心・離障心・歓喜心(udaggacitta)・明淨信が起きたのを知って、四聖諦を説法する。」(V i 16, 18, 181, 225; ii 156; M i 379; A iv 209, 213)でのudaggacittaは良い意味での高揚した心理状態と言えよう。これに対して、「疑・不作意・昏沈・睡眠・恐怖・歓喜(ubbilla)・麁重・過度の勤精進・懈怠・欲等のために三昧が滅する。」(M iii 159)に見られるubbillaは不善の興奮である。

aratiは上述の例のようにmuditāの逆であったが、「好(piya)・愛(pema)・楽(rati)・愛欲(kāma)・渴愛(tanhā)から怖畏が生じる。」(Dhp 32)という例からは、ratiは決してmuditāと同一視はできず、かえって不善の渴愛を意味していることが知られる。

また好感を表すpiyaについては、上の例や「憂・悲・苦のある者は好(piya)を縁とする。好がなければ安楽(sukhino)となり、憂は滅する。」(Ud 92)から、rati同様に不善の意味である。

3. anumodanā

muditāと同じくmudを語根とするanumodanāについては拙稿「隨喜」(印仏研34-2)に述べたように、後世、現代に到るまで、テーラヴァーダ仏教では非常に重視されている。

4. まとめ

pītiとmuditāはnikāyaにおいても意味は明瞭で、禪支・梵住として定義されたが、他の特に不善の喜を表す語については取り上げられていない。喜を受としてしか扱わない北伝仏教と異なり、パーリ仏教は、心理分析の発達に伴い喜を単なる感覚として解釈するだけではなく、能動的な心理作用として捉えた。しかも善心所として捉えられた。積極的に喜を捉える姿勢は初めは禪の支分としてpītiに注目し、後には在家にも受け入れ易い四梵住のmuditāを重視し、更にanumodanāとして積極的に喜ぶ姿勢を現代に生かしているのであろう。

〈キーワード〉 喜、隨喜、パーリ

(龍谷大学講師)